

Title	序
Sub Title	
Author	大石, 昌史(Oishi, Masashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2014
Jtitle	哲學 No.132 (2014. 3) ,p.i- iii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：論集 美学・芸術学： 美・芸術・感性をめぐる知のスパイラル(旋回)
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000132--005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

美学とはいかなる学であろうか。美学を「美」の学と捉えるならば、それは、美しい事物の存在に即して美の本質を原理的に問う学、すなわち古代ギリシア以来の美の形而上学、存在論としての美学となる。他方、美学を *aesthetica*（感性論）として捉えるならば、それは、美を判別する能力としての「感性」の働き方を様々な美的現象に即して解明する美意識の心理学、認識論としての美学となる。西洋において、美は、真や善とならんで、他へと還元されることのない、存在すること自体が有する形而上学的な価値として捉えられた。中世における感覚的なものの否定を通じた美の貶価的位置づけを経て、ルネサンス期にはプラトニズムが復興し、近代18世紀には美が芸術の本質として積極的に評価されるようになった。このような18世紀において、美学はバウムガルテンによって感性論として規定され、続くカントによる美的判断に対する超越論的な批判を通じて、その後の学としての展開の基礎が置かれた。

これに対して、芸術学は、詩・音楽・演劇・絵画・彫刻・建築・写真・映画、等の様々なジャンルにわたる「芸術」の本質や具体的な現象を、創作技術や創作物（作品）に即して、体系的ならびに歴史的な観点から、科学的・実証的に問う学である。古代ギリシア以来、芸術は、自然を模倣する技、技術を通じた自然の模倣とみなされてきた。「模倣 *mimēsis*, *imitatio*」は、芸術の近代的な本質規定とされる人間の内面の「表出 *expression*」との対比において、その意味を「模写」「再現」として限定的に捉えられる以前は、きわめて多様な内実を有しており、そこには対象としての自然の忠実な再現、美しい自然の選択的呈示、理想的な自然の構成的創出までが広く含まれていた。ルネサンス以降の近代には、自然の模

倣に加えて古代作品の模倣が称揚され、「古典主義」の観念が確立した18世紀には、感性論としての美学の誕生とほぼ時期を同じくして、博物誌的あるいは列伝体の記録・物語を超えた、近代的な美術史がヴィンケルマンによって基礎づけられた。

美学や美術史が近代的な学として成立した18世紀以降、現代に至る西洋芸術の展開を簡単に見てみよう。美や調和をその本質とみなし、古代ギリシア・ローマを模範とする「古典主義」的な芸術観は、すでに18世紀末から19世紀前半において、崇高や無限なものを好む「ロマン主義」的な芸術観によって相対化されるようになった。19世紀半ば以降には、「写実主義」「自然主義」的芸術が登場し、真実を追求する芸術の社会批判の機能が意識されるとともに、他方において、芸術の道徳や社会規範からの独立を主張する「唯美主義」「芸術のための芸術」が現れた。さらに、19世紀末から20世紀になると、時代を特徴づける統一的な「様式」が持続的に創作を導くことはもはやなくなり、一定の期間、一定の集団による実験的な「芸術運動」の消長が繰り返される状況となった。世界的な市場の拡大、情報伝達手段の発展等を通じて、国家や民族の域を越えた「大衆社会」が現出した20世紀における芸術現象は、様々な芸術運動の消長を繰り返しながら、もはや美や崇高、調和や真実、等の普遍的な価値を本質とする伝統的な芸術概念によっては規定し得ない状況を呈している。

このような西洋近代における美と芸術との融合から分離へと至る歴史的過程、ならびに芸術様式が解体した現代の状況において、美学・芸術学という学がいかなる役割を果たし得るのか、という問題意識において本論文集は編まれている。同時代から将来に向けて学の果たすべき役割を問うことは、学自体に可能な多様性を検証することとなる。それ故、本論文集には特定のテーマを設けていない。内容的に、前半には、日本の詩における自動詞性の優位、美的現象としての世界の是認、美的義務論、芸術の遊戯性、文彩の多声的分析、近代美学の超越論的位置づけをそれぞれ論じた美

学・芸術哲学（基礎研究）に関わる6篇の論考、後半には、日本美術史分野から神仏習合の春日宮曼荼羅図、鎌倉期の簡素な薬師像、西洋美術史分野からバロック期の古典主義画家プッサン、19世紀末の新印象派、音楽学・音楽史分野から後期ロマン派のブルックナー、現代の音楽家ライヒと彫刻家・画家ルウィットとの比較、それぞれについて論じた芸術史研究（応用研究）に関わる6篇の論考、計12篇にわたる、対象においても方法においてもきわめて多様な論考を収めている。

これら12篇の論考が示しているように、美・芸術・感性をめぐる考察は、対象の広範さに対応して、それに対する学の内容もきわめて多様な広がりを見せる。むしろ、この広がりとは「知」が有する本質的な性格と言える。知は、対象となるものとの相互作用的な運動性において、「旋回」しながら、その射程や影響を広げていく。旋回は、一方で、知の及ぶ全体を鳥瞰すべく、経験を超えた形而上学的領域にまで上昇する。また、同一の地平において、歴史的・博物誌的関心を抱いて、過去および現在に存するすべてのものを枚举・検証しようと拡張する。さらには、自らの根底を確認すべく、精神の深部、欲望の領域、無意識にまで下降する。このように上昇し、拡張し、下降する知の旋回の一つ一つが他の旋回と呼応し、やがては大きな渦を巻き起こす。それが一つの学を内的に充実・発展させ、あるいは新たな学の誕生を促してきた。本論文集の副題にある「知のスパイラル」とは、美学・芸術学が、このような意味での旋回と旋回とを連動せしめ、より大きな旋回を生み出しながら展開していくべきことを示すものである。また、それは同時に、このような学に関心を持つ読者の心にも知の旋回を新たに生み出すことへの期待の表明でもある。

大石昌史